

(第1報)

大谷女子大 岡 佐智子・福井雅巳 城南女子短大 ○雀部寿恵

目的 家族をめぐる状況は、核家族化の進展、子供数の減少に伴って大きく変化し、家族の機能も大幅に縮小した。家族をつなぎとめる絆をどこに見るかも従来に増して難しくなっている。本研究は主に40代の母親の家族に対しての考え方を、先祖の守りと老後生活への関心に焦点をあて探ろうとするものである。

方法 昭和62年11月、関西在住の女子大生、女子短大性(359名)の母親を対象として質問紙調査法による調査を行った(回収率62.1%)。調査データの解析はSPSS統計パッケージを用いた。単純集計とクロス集計の一部を報告する。

結果 自分の子供が姓を継承することを7割の親が強く望んでいた。男女の子供を有する親は、男子が姓を継ぐことに安心しており(8割強)、女子のみの有する親では、全ての子供の姓が変わってもよい(4.5割)が、姓を継いで欲しい(4.1割)をやや上回っている。一方、先祖の守り(墓)では、男女有りの親は子供のうちの誰かが守ってくれるから安心していているのが9.1割と高い値を示すが、女子のみ子供の親では安心していている人が4.7割いる。一方、姓は途絶えても墓だけは守って欲しいとする人が3.7割おり、墓の守りへの不安を示す。また、死後のことに関心がないとする人は0.1割とごく小数である。次いで老後に望む生活様式については、男女の子供を有する親の1/3は娘夫婦との同居を希望しており、また、女子だけを有する親のうち、全ての子供の姓が変わってもよいとする親の半数が娘夫婦との同居を希望している。何れの場合も母親は娘の結婚後も娘と緊密な関係を持続したいとの願いを持っていることが認められる。